鹿児島県霧島アートの森
二〇二二年度 アートラボ

イカ画家 宮内裕賀展

イカセカイ

霧島アートの森
KIRISHIMA OPEN-AIR MUSEUM

鹿児島県霧島アートの森
二〇二二年度 アートラボ
イカ画家
宮内裕賀展
イカセカイ

2022年度　鹿児島県霧島アートの森　アートラボ

イカ画家 宮内裕賀展「イカセカイ」

会期：2023年2月22日（水）～4月16日（日）

主催：鹿児島県霧島アートの森

後援：ＫＫＢ鹿児島放送

協力：烏賊匠／いか道楽／株式会社　和平商店／墨や／日章学園鹿児島城西高等学校

ごあいさつ

宮内裕賀は、イカの美しさと美味しさに魅了されて以来、イカへの旺盛な探究心を礎にひたすらイカの絵を描き続ける「イカ画家」です。

イカをもとにして作った絵の具を用い、その生と死に共鳴する作品を生み出してきた宮内は、2021年に鹿児島県湧水町で、これまでで最も大きな作品を公開制作し、社会や私たちの日常に想いを馳せながら、濃密な彩りを画面に施すことで生きることの歓びを表しました。

本展は、「イカ」という生命の美しさや儚さに着目し、社会の変化や自身の内面を反映させた宮内の作品群をとおして、現代を生きる私たちや文明の有り様について見つめ直すきっかけを創出するものになるでしょう。

主催者

私は、絵を描くためにイカを描いているのではなく、イカを描くために絵を描いています。

ここまで成長して、たくさんの人の手を経て、自分のところまできてくれたイカのことを思い、そのイカを描くための力をイカにもらっています。

海で命懸けで暮らしてきたイカを人工物に囲まれた安全な場所で食し、そのイカ墨を使って表現していることへのいたたまれなさのような気持ちがあります。水族館で展示され命尽きるまで姿を晒されるイカの短い一生のことを考えます。

イカは過酷な自然から、美や生をもたらしてくれる神のような存在であると信じています。

毎日イカを食べ、イカを描いていると、イカに支えられイカを描かされていると感じるようになりました。

私は描くことでイカに生かされています。

イカは何か、この世を変える大きな秘密を持っているのではないかという気がしています。

「イカセカイ」展覧会中に、館内のカフェでは食べ物のイカとしてイカカレーを提供し、作品の中では生き物としてのイカを表現しました。イカを食した来場者の方々が、イカの絵を鑑賞している様子を見ていると、イカの生命と私たちが無意識下で繋がって、ずっとお互いを大切にしていく世界になって欲しいと思いました。

イカは人間の資源として消費されるためだけに生まれたのではないこと、全ての生命は、地球の一部であり一つ一つの命であることを意識してもらえるように描き続けます。

宮内　裕賀

作品リスト タイトル、製作年、材質、寸法（縦×横×奥行き）

01　アオリイカの一生　2021
木製パネル、油彩、アオリイカのイカ墨、アオリイカの水晶体、イカ甲　72.7×116.7cm

02　イカイカ天国　2021
イカ墨、水彩、襖
185.7×947cm

03　イカ加工品　2023
紙、プラスチック、アルミ、ビニール、アクリル絵の具
120×720×20cm

04　イカセカイ　2022
キャンバス、油彩、イカ墨、インク、マイカ、アルミ箔
162×260.6cm

05　イカトカイ　2019
カットキャンバス、油彩、イカ墨、イカ水晶体
300×175cm

06　イカの色　2022
キャンバス、イカ墨、油彩
112×162cm

07　イカの哲学　2022
キャンバス、イカ墨、インク、マイカ
162×194cm

08　イカ墨拓本　2019
カットキャンバス、油彩、イカ墨
162×112cm

09　イカ未開　2022
キャンバス、油彩、イカ墨
116.7×91cm

10　スルメイカの眼　2022
キャンバス、油彩、イカ墨
45.5×53cm

11　ヨーロッパコウイカたち　2022
グルーキャンバス、イカ墨、イカ甲
162×130.3cm

12　ヨーロッパコウイカの眼　2023
キャンバス、油彩、イカ墨
72.7×91cm

13　生き物の眼　2022
キャンバス、油彩、イカ墨
162×162cm

14　解剖と泳ぎ　2022
木製パネル、油彩、イカ墨
162×97cm

15　重光　2003
キャンバス、油彩
116.7×91cm

16　新鮮なアオリイカの眼　2022
キャンバス、油彩、イカ墨、マイカ
53×65.2cm

17　墨群　2023
コットンキャンバス、スルメイカの墨、スルメイカの水晶体、マイカ　130.3×97cm

18　生死　2021
木製パネル、イカ墨、イカ甲、マイカ
80.3×53cm

19　食べ物の眼　2022
キャンバス、油彩、イカ墨
162×162cm

20　方舟　2022
キャンバス、油彩、イカ墨
116.7×116.7cm

21　初めて描いたイカの油絵　2004
木製パネル、油彩
116.7×91cm

22　アオリイカの解剖　2022
木製パネル、油彩、アオリイカのイカ墨
44.4×64.1×4.5cm

23　イカ墨８種　2022
水彩紙、アオリイカのイカ墨、コウイカのイカ墨、スルメイカのイカ墨、ソデイカのイカ墨、ケンサキイカのイカ墨、ヤリイカのイカ墨、ミミイカダマシのイカ墨、ユウレイイカのイカ墨　27.1×33.1×4.5cm

24　ウスベニコウイカ　2021
木製パネル、水彩、イカ墨、ウスベニコウイカのイカ甲　38.4×56.6×4.5cm

作品リスト タイトル、製作年、材質、寸法（縦 × 横 × 奥行き）

25　サメハダホウズキイカ　2021
木製パネル、水彩、サメハダホウズキイカの墨
26.9×33.8×4.5cm

26　ソデイカ1　2021
水彩紙、水彩、ソデイカのイカ墨
108×77.8×1.5cm

27　ソデイカ2　2021
水彩紙、水彩、ソデイカのイカ墨
108×77.8×1.5cm

28　ソデイカ3　2021
水彩紙、ソデイカのイカ墨
108×77.8×1.5cm

29　マグロ胃内容物　2021
木製パネル、水彩、マグロ胃内容物のイカの数種のイカ墨　30.1×44.4×4.5cm

30　ミナミホタルイカモドキ　2021
木製パネル、ミナミホタルイカモドキの墨
38.4×56.6×4.5cm

31　ミナミヤワライカ　2023
木製パネル、ミナミヤワライカのイカ墨、ミナミヤワライカの水晶体　19×33.3cm

32　ミミイカダマシ　2021
木製パネル、水彩、ミミイカダマシのイカ墨
30.1×44.4×4.5cm

33　ユウレイイカ　2023
木製パネル、ユウレイイカの墨、ユウレイイカの水晶体　33.3×24.2cm

34　水晶体　2021
木製パネル、水彩、アオリイカの水晶体
33.3×19×5cm

35　アオリイカの共喰い　2021
木製パネル、水彩、アオリイカのイカ墨、アオリイカの水晶体　38.4×56.6×4.5cm

36　イカ墨とタコ墨　2022
木製パネル、スルメイカの墨、マダコの墨
33.3×53cm

37　コウイカとカミナリイカ　2022
キャンバス、コウイカの墨、カミナリイカの甲
33.3×53cm

38　ユウレイイカ解凍　2022
木製パネル、油彩、ユウレイイカのイカ墨
38.4×33.1×4.5cm

39　ヨーロッパコウイカ　2023
キャンバス、イカ甲、イカ墨
33.3×53cm

40　解剖　2022
木製パネル、油彩、イカ墨
45.5×65.2cm

41　鰹節　2023
木製パネル、グルーキャンバス、イカ墨、イカ甲
33.3×53cm

42　無題　2023
キャンバス、油彩、イカ墨、イカ甲
20×60cm

43　イカリング　2020
カットキャンバス、油彩、イカ墨、イカ水晶体、イカ甲、水彩　135×650cm

44　イカ画材　2023
アクリルミラー、ガラス容器、アオリイカ墨、アオリイカ水晶体、アオリイカ軟甲、アオリイカ顎板、アオリイカ歯舌、スルメイカ墨、スルメイカ水晶体、スルメイカ顎板、ソデイカ眼球、ソデイカ水晶体、ユウレイイカ水晶体、ユウレイイカ顎板、ユウレイイカ軟甲、サメハダホウズキイカ表皮、サメハダホウズキイカ水晶体、サメハダホウズキイカ顎板、サメハダホウズキイカ軟甲、ヤリイカ軟甲、コウイカ貝殻、カミナリイカ貝殻、コブシメ貝殻　80×170cm

45　定置網漁業　2021
木製パネル、イカ墨、イカ水晶体
64.1×91.4×5.5cm

高校生によるイカカレープロジェクト （鹿児島城西高等学校調理科生徒との共同企画）

本展では、作品を見て鑑賞するだけではなく、来場者に五感の全てを使ってイカの素晴らしさを感じて欲しいとの宮内の想いから、高校生によるイカカレープロジェクトが開始された。本プロジェクトでは鹿児島城西高等学校生徒の皆さんと宮内の共同企画として話し合いと試食を重ねて改良し、イカ墨によるブラックカレーと、イカを含むシーフードをメインとしたホワイトカレーによるバイカラーカレーが開発され、本館カフェ＆ショップで販売された。生徒の皆さんと、話し合いを重ねた甲斐もあって100食限定で販売されたカレーは好評を博し、予想を上回る売れ行きで完売となった。来場者の皆様にはイカを「見る」だけでなく、「味わう」ことで、その素晴らしさを感じていただく機会となった。

「バイカラーカレー」 提供（限定100食） 【日時】2月22日（水）～

ワークショップ 「つくって飛ばそうイカ凧あげ」

ワークショップ「つくって飛ばそうイカ凧あげ」では、普段宮内が制作に用いている色味の異なる2種類のイカ墨で描画し、オリジナルのイカ凧を制作するワークショップが行われた。

イカ墨を使っての制作に初めは戸惑いながらも、思い思いに制作し、オリジナルのイカ凧を完成させた。

【日時】3月26日（日）、4月16日（日） 13:30～15:30

セピア色が繋ぐイメージ

本展は、これまでの宮内の代表作に加え、新作の平面作品、インスタレーションを加えた45点の作品が展示された。今回の展覧会の副題「イカセカイ」は回文になっており、イカを契機にして、セカイをぐるっと一周するようにイカにまつわる全ての事柄を表現して伝えたいという宮内の思いが込められている。

本展の会場としては、第2展示室と展示ロビーを使用した。宮内が水族館の巨大水槽をイメージしたという展示ロビー中央には、イカにまつわる様々なイメージをパノラマ状の画面に表現した《イカリング》が配され、展示ロビーでは会期中、2021年湧水町の総合交流施設「いきいきセンターくりの郷」で行われた公開制作交流のダイジェスト映像とともに、「KKB鹿児島放送制作【地球外からきた生物!?】『イカに生かされて』“Jチャン+”カメラマンレポート」が放映され、宮内の作品コンセプトとこれまでの取り組みを紹介した。

展示室に入ると、高さ7m40cmの展示空間の中、最も広い壁面である北側壁面をV字に横断するように作品が配置され、さながらイカの泳ぎ回る広大な海のようである。その展示空間の中を鑑賞者が回遊するようにじっくりと作品に見入っている。

入口の正面上を見上げると《イカトカイ》に描画されたイカが上から見下ろすように展示され、展示室奥には《イカイカ天国》が配置されている。来場者はその鮮やかな色彩に誘われ、展示室内へと引き込まれる。展示室に入ると、四方に展示された作品中の巨大なイカの眼に見つめられているような感覚を覚える。イカの「眼」を題材にした作品が多いことについて、宮内は「超能力のありそうなイカの眼に畏怖を感じている。」と語っている。

宮内は長年、イカの「生」と「死」に深く共鳴し、作品として表現し続けている。

宮内は作品制作の方向性として、生き生きと水中を泳ぐイカの他にも、《アオリイカの解剖》のようにイカを解剖した姿を観察し、その中に「美」を見出すことを試みている。死んだ状態の生物を描きながらも、ネガティブな印象を受けないのは、宮内が「死」を循環する生命の一つの形態であると捉え、その美しさを「生」と同等に表現しようと試みているためであろう。

「生命が循環し、他の生命と繋がる」というテーマは今回展示された他の作品の中にも表現されている。《イカの哲学》では、「地球にいる全ての生命はひとつ消える度にイカの色素胞の一つになるという夢を見て、題材にした作品」であると語っている。

本展のメインとして位置付けられている作品「イカセカイ」について、宮内は次のように説明している。「巨大なイカがイカを共食いしている様子。オスのアオリイカがメスのアオリイカを襲い始める最初から共食いを観察した。捕らえられたメスのアオリイカは墨を吹いて必死に逃げようとしていたが、ある瞬間から眼の力が無くなって、生き物から食べ物に変わった。画面上部にはイカ釣り漁船の集魚灯、下部には薩摩イカ餌木を配置した。背景には、横瀬古墳の上から眺めた田園と太平洋を描いている。イカを釣ってきてくれたおじさんと子供の頃にいつも散歩していた場所で、イカ画家の原風景である。円を描くように周りに配置しているのは、イカが絶命していく様子である。水族館で撮影された2分半の映像を資料にした。提供していただいた動画が撮られたのは自分の誕生日で、私が生まれた日に死ぬイカもいて、私が死ぬ日に生まれるイカもいるということを実感してこの作品を構想し始めた。イカの輪廻のように画題も回文になっている。」

平面作品を主な表現手段として制作している宮内だが、今回は「物質として消費されるイカ」と「イカの実存」を対比させて2点のインスタレーションとして表現することを試みている。「生」「死」といった、深刻なテーマを含みながらも、作品が軽やかさを失わないのは、宮内が日常的に夢の中のイメージを記録し、作品制作の際にイメージの起点としている点に起因しているのではないか。「イカ」を起点として、宮内のイメージは自由自在に飛躍する。空想から生まれたイメージは、ややもすると現実の世界と遊離して幻想的なイメージとなる場合が多いのではなかろうか。しかしながら宮内の作品が確かな現実感を把持しているのは，観察に基づく描写の力量とともに、宮内が自作し、作品中に用いているイカ墨の色との関係性を感じずにはいられない。イカ墨のセピア色は穏やかな色調で、観る者にどこか郷愁を感じさせるとともに、宮内の空想を現実に繋ぎ留めているようにも感じられる。

宮内は本展のメイン作品《イカセカイ》についての説明の結びとして、以下のように語っている。「イカを描き続けてきて、イカ好きとして伝えたいイカの絵と、絵描きとして描きたいイカの絵は別ということがわかってきた。イカの世界ではなく、自分の世界のイカを描こうとしている。」次は一体どのような世界を見ることができるのだろうか。宮内のこれから先の飛躍を感じさせる展覧会となった。

中森祐介（鹿児島県霧島アートの森 学芸専門員）

宮内　裕賀　Yuka Miyaudhi

1985年鹿児島県大崎町生まれ、タラ・デザイン専門学校卒業。鹿児島市在住。

〈主な個展〉

2022年　イカ画家宮内裕賀 個展＠呼子いか道楽／いか道楽（佐賀）
2019年　水光る町の呼子イカ画展／鯨組主中尾家屋敷（佐賀）
2018年　イカスイム／レトロフトMuseo（鹿児島）
2015年　全国いか加工業協同組合創立50周年記念式典 イカ画家宮内裕賀展／ホテルオークラ東京（東京）
国際頭足類諮問委員会函館会議（CIAC2015）イカ画家展示／函館国際ホテル（北海道）
2014年　イカがなmono図鑑展／イリヤプラスカフェ＠カスタム倉庫（東京）
2012年　イカ展／福岡アジア美術館交流ギャラリー（福岡）
2011年　イカ展／レトロフトMuseo（鹿児島）

〈主なグループ展〉

2022年　アートマEX./霧島アートの森（鹿児島）
第10回美の起原展／美の起原（東京）
2021年　フロム・ジ・エッジ from the edge - 80年代鹿児島生まれの作家たち／鹿児島市立美術館（鹿児島）
2020年　Street Museum/東京ミッドタウン（東京）
アートマEX./アミュプラザ鹿児島（鹿児島）
2017年　Cephalopod Interface in Crete/クレタ水族館（ギリシャ）
『大隅アートライブ ～カミは“すみ”に宿る～』展／横瀬古墳（鹿児島）
2015年　第30回 国民文化祭・かごしま2015開催記念特別展示 アートな海のいきものたち／いおワールドかごしま水族館（鹿児島）
Cephalopod Interface in Hawai'i/ハワイ大学（アメリカ）
2012年　九州アート全員集合展／熊本市現代美術館（熊本）

〈主な受賞歴〉

2022年　第10回美の起原展特別賞受賞
2020年　MONEX GROUP「ART IN THE OFFICE 2020」受賞
2019年　TOKYO MIDTOWN AWARD 2019アートコンペ準グランプリ 受賞
2019年　第22回岡本太郎現代芸術賞入選
2010年　KTS 主催第14回ナマ・イキ VOICE アートマーケットグランプリ受賞

〈公開制作〉

2021年　アートラボ イカ画家 宮内裕賀 公開制作交流『イカイカ天国』/いきいきセンターくりの郷（鹿児島）
2013年　第56回全国すし連鹿児島大会／鹿児島アリーナ（鹿児島）

チラシA4 表

チラシA4 裏

広報実績

（1）新聞　南日本新聞 2/23・2/24・4/1、西日本新聞 4/12
（2）テレビ・ラジオ　KKB鹿児島放送 3/2
（3）その他（抜粋）　財団情報誌「憩」2・3・4月号、湧水町広報「ゆうすい」1・2・3月号、TJカゴシマ 3・4月号、かごしま文化情報センター（KCIC）、ART AgendA、アートコレクターズ4月号、九州王国3月号、地域創造レター 3月号

謝辞

本事業の実施にあたりご協力を賜りました下記の関係機関、
関係者の皆様に心より感謝申し上げます。（敬称略・順不同）

烏賊匠
いか道楽
株式会社　和平商店
墨や
日章学園鹿児島城西高等学校
ＫＫＢ鹿児島放送

［記録集］
アートラボ イカ画家 宮内裕賀展「イカセカイ」

執筆 ―――――― 宮内裕賀、中森祐介
デザイン ―――――― 永石浩幸
撮影 ―――――― 南フォトスタジオ、鹿児島県霧島アートの森
編集・発行 ―――― 鹿児島県霧島アートの森
発行日 ―――――― 2023年7月24日
© 鹿児島県霧島アートの森 2023